

# 平成 24 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が748編も寄せられました。山口健一選考委員長、伊藤伸子副委員長、岩壁清吉、吉岡謙二郎、王尾富美子、桐野輝久委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀6編、佳作36編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

## 最優秀賞

### 志を継ぐ者・緑の庭

県立中央農業高等学校二年

三川 浩正

僕には、大好きな祖母がいる。いや、正しくは、「いた」だが。「次に会うのはクリスマスだね。」と小学3年の冬にかわした約束は、今も果たされぬままになっている。

祖母の家は、潮の香りが漂う、海からほど近い場所にある。外国暮らしが長かった曾祖父が造ったその庭は、塀が大人の背丈よりかなり低く、道行く人にも花を楽しんでもらいたいという思いがこもった庭なのだと言われた。草花の他にも、多種類の梅や、カキの樹、ヤマモモ、ビワ、ユスラウメ、ヒメリンゴなどの実のなる樹があちこちに。夏には、ジャングルのように草木が生い茂る庭は、僕の絶好の遊び場であり、居心地の良い場所だった。

曾祖父の意思を育み、その樹々達を大切に育てていた祖母。毎年、梅雨の前には、梅の実を大鍋いっぱいジャムに、ビンに漬け込んでジュースにして。梅雨の後には、コケモモを鍋で煮つめてジャムとジュースにして、僕の家までフーフー言いながら、笑って届けにきてくれた。日射しが強くなり、体に疲れがたまってくる頃に届けられた梅やコケモモのジャムとジュースの甘酸っぱさは、身体をやさしく癒やしてくれた。今では、母と僕で収穫し、ジャムやジュースを作っている。それは不思議なくらい祖母の味とそっくりで、懐かしく、切なく、そして優しい味が口いっぱい広がりに、祖母の記憶を呼び戻してくれる。

最近になってあることが付いた。祖母がしてくれていた、僕にとって当たり前だった事は、実は特別な事だった。僕が植物を育て、食べ、楽しみ、それを好きと感じることは、あの庭の樹々や緑の中で、自然をありのままに受けとめて暮らしていた曾祖父や祖母がいてくれたからに違いない。

暮らした庭、草花と樹々、ふと足をとめて庭の姿に心を留める人々。自分自身がまず楽しみ、それを街の人とも共有しようとした曾祖父の庭造り。自然を慈しみ、それに手を加えて、身近な人達にも楽しみを分けてくれた祖母。二人の思いと意志は母と僕に受け継がれている。「あの頃の庭のまま残してくれてありがとう。」と見知らぬ人にニコリと話しかけられたのは、ボタン桜、シダレ桜、右近桜が次々と咲き誇る春のある日。

祖母の庭には、大輪のバラを咲かせていたアーチがあった。その海の匂いのするアーチを僕の始めた小さな野菜畑に運んできた。それを利用してミニトマトをはわせて、今まで見たことのないようなトマトのアーチを完成させた。色々な経験を積み重ねて培ったものを惜しみなく注いでくれた祖母が大切にしていたアーチが、トマトをたわわに実らせる手助けしてくれた。受け継がれて来たそれぞれの心が一本の線となって、今、真っ赤に熟したトマトとなった。色彩豊かなトマトの向こうに、突き抜けるような青空がのぞく。

僕もまた、何かを残せるだろうか。迷いの中でも真っ直ぐに歩む強さを持ちたい。志を継ぐ者の一人として。

## 最優秀賞

### 終わりになき心の甲子園

県立相模原中央支援学校高等部三年

保田 健太

「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE」これは僕が心から信じ大切にしている言葉だ。僕は車椅子だがスポーツが大好きで、中でも高校野球の観戦はここ十年欠かせない。今では、僕の発想の中軸であり思考を巡らす道標となっている。様々な季節の一試合一試合に、新たな発見と感動があり学べるからだ。それを、自分の日常生活にどう生かしていこうかとも考えている。

上位チームや勢いを感じるチーム程、プレーが緻密だ。例えば、走者を刺す場面で、必ずフォロワーに走る選手がいる。もし、エラーがあったとしてもそれを最小限に押さえられるからだ。これこそ、真のチームプレーではないか。これは、僕達の日常生活でもとても大切なことであり、人を成長させ信頼関係や絆を深める根源である。また、デッドボールや負傷した時に、相手チームの選手がスプレーをかけている。そして、全力疾走・挨拶・礼儀など上位チームほど徹底され、自然に熟している。決して、結果を導くのは技術だけではないと思う。それに、野球部の仲間や応援団、吹奏楽とチア、父母と先生が丸となり選手と一緒に戦っている。一投一打に響き、喜びの歓声で球場が揺れ、感動の涙で一つになる。これが観戦の醍醐味だ。

ある試合のピンチの場面で「頑張れ！お前は一人じゃないんだぞ！」と叫んだ人がいた。そして見事に乗り切った。彼らの心に届いたのだ。よく、「一番のライバルは自分だ。」という。確かに全ての答えは自分の中にある。でも人はピンチの時、焦り落ち込み自分を見失ったりする。世界中から置き忘れられたような孤独を感じる人もいるだろう。そんな時、誰かの一言が背中を押して、眠っている何かを呼び覚ます。逃げない勇気や諦めない自分を思い出させてくれる。その繰り返し、柔軟で強く負けない心を育てていく。だから、人は一人では成長できないと僕は思う。

けれども、人が人を傷つけてしまう現実もある。一つの集団の中で、人と違う言動がいじめの原因になるとよく聞く。だけど、そういった先入観はとも残念で、もったいない発想ではないか。なぜなら、新しいものが生み出される時、進化のプロセスとして必要だからだ。パソコンや携帯など身の回りの全ての進化は、以前と違った発想から生まれる。話し合いでも、同じ意見ばかりでは結論も変化がない。大切なのは、違った意見や反対意見が来た時に、「なぜ、そう考えたのか。」を説明することだ。たとえ、くだらないと思える意見でも、何かのヒントになる可能性はあるからだ。このように、一人ひとりが発想の転換をして、自分の好きな自分であれば、きつといじめもなくなら、僕は信じている。

そして、二〇二五年には高齢者が、全人口の二五%を超えると推測される少子高齢化。この厳しい社会に旅立つ僕達が、人の心に弱肉強食であってはならない。幸せは、笑顔の足し算から生まれ広がっていくのだから。